

れき ぶん

となん歴民だより vol.27

Morioka tonan history and folklore museum

平成23年6月29日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL/Fax 019-638-7228

市民参加展・鎌田コレクション

昭和のうつわ展—昭和30～40年代を中心に

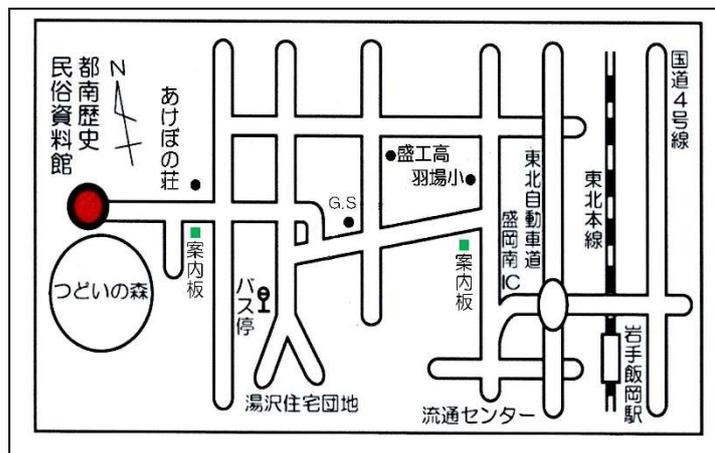


是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

- ・〈特別寄稿〉
鶏と兎との生活誌
- ・盛岡市玉山歴史民俗資料館紹介
- ・市民参加展報告
- ・資料は語る⑦
- ・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介⑦
- ・となんの昔ばなし⑦

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
年末年始

今回は、鶏資料蒐集家中村秀雄氏が経験してきた鶏飼育と兎飼育について、「鶏と兎との生活誌」として綴った内容をご紹介したい。中村氏の鶏資料は、総合研究大学大学院（以下「総研大」と略称）によって調査・目録化されている。「鯨の殿下」として有名な秋篠宮殿下は鶏の研究者としても有名であり、その資料群は総研大によって調査・目録化されている。中村氏の蒐集資料は、これらの資料群と同様重要なものである。中村氏の兎飼育は鶏の餌代を稼ぐために始まったそうである。そのため、中村氏の鶏飼育と兎飼育は常に補完関係にあったといえる。以下は、その生活誌ともいえる少年時代の内容である。

中村 秀雄

小生は、鶏の餌を買うために兎飼育で小遣い稼ぎをしていた。鶏は、トムソン系横班プリマスロック・岩手大型名古屋種・南部声良鶏などの大型鶏から、陸中地鶏・東天紅鶏・烏骨鶏など中型鶏、桂矮鶏・小軍鶏・ゲームバンダム・セブライトバンダム等約 10 種、約 30 羽飼育していた。少年時代は鶏・兎飼育だけではなく、同級生・近所の仲間とのつき合いも多く多忙な毎日であった。遊び惚けて兎の青草採りが夕食後になるのも度々あった。当然宿題提出も怠り担任教師に大目玉を食らったが、この頃が毎日充実した日々を暮らしていたと思う昨今である。

さて、時が経ち、夢叶って町人が農業高校の畜産科へ入学することができた。1 年生の秋恒例の収穫祭に開校以来初めての畜産品評会が開催される事になった。火付役は橋本孝也先輩である。学校の評可を取付け、先輩に協力し展示金網の調達から展示台作りまでやり遂げた。橋本先輩の父君は鶏界で著名な橋本善太さんである。昭和 14 年度全国産卵能力検定で白色レグホーン種（4 - 42 号）の世界最初の年間無休産卵 365 卵鶏の作家である。橋本先輩は鶏はもとより兎に関しても知識豊富であった。小生も同志として鶏と兎飼育に大いに勉強させて頂いた。又、お互い鶏好き・兎好きの間柄ゆえ先輩に可愛がられた。この秋の畜産品評会（鶏と兎のみ）では先輩が出品した鶏・兎は上位独占した。小生のもの（岩手大型名古屋種・陸中地鶏）は中の上クラスであった。兎にいたっては、先輩の二戸兎の独壇場であった。この時初めて二戸兎を見聞したのである。この兎は在来白色種の体重 2.5~4kg の約 2 倍近い 5~8kg である。前記の橋本先輩の父君善太氏は、蚕種業（蚕の優良種を作り上げ養蚕家へ種紙を普及する仕事）を営んでおり、蚕の改良で遺伝学を修めた方である。当時、岩手県の鶏の改良に当たっては当県の技師も橋本家へ出入りし、養鶏振興に大いに力になった方である。また、善太氏（当地では愛称で「ゼンタサン」呼ばれていた）の弟八百二さんは岩手県議会議長として県勢発展に力を尽くしていた。昭和 21 年（1946）から岩手県福岡町（現二戸市福岡）より農民知事で有名な国分謙吉が戦後復興を担っていた。当然、知事と県会議長は近い間柄ゆえ、橋本孝也先輩が二戸兎を入手できる環境にあったのは当然と言ってもよかった。後年小生は、高校 2・3 年生で品評会に携わる様になり、先輩より種兎を譲られ生まれた子兎達は、先輩の兎に次ぐ兎となり上位を占めるほどになったのである。

ところで、その二戸兎を小生が盛岡で手に入れることができたのは次のような背景があったからだった。そもそも、我が国は明治以降、国威高揚のもと軍備増強のため、防寒用毛皮、軍隊用缶詰用肉の需要の高まりで養兎産業が盛んであった。その中で在来日本種は平均的に牝 2kg、牝 2.5kg 程のやや小型の兎であった。軍部としてはそれより大型の兎を要望していた様であった。当県は軍馬生産地として大いに名声を挙げていたが、軍関係の毛皮納入は、狐・狸・穴熊くらいであった。しかるに野兎は毛皮としては破れ易く、小型のため不向きであったようだ。当時の日本在来種は前記のごとく 2kg 前後の中型種であった。毛皮はもとより缶詰用肉も少なく需要に負えられずにいた。明治から昭和初期に岩手県二戸郡北福岡町の在住の小坂友次郎は馬・牛・鶏・兎の改良増殖を計画した。日本在来種を大型化するため、外国産大型種を自ら輸入した。それらはフレミッシュ=ジャイアント種・ニュージーランド=ホワイト種などである。これらを在来種と交配改良し普及を計ったのであった。この改良種を地元では「友次郎兎」とか「軍兎」と呼び合い親しまれていった。これら二戸兎は当県の奨励品種として認定され二戸兎として昭和 13 年頃は軍部へ約 20 万羽が納入されるようになったのである。

盛岡市玉山歴史民俗資料館紹介

巻堀小学校で教育の一環として巻堀小学校の児童、地区民が一体となり、地域に伝わる土器・石器・民具などの多数の資料を収集し、校内の郷土資料室に展示していました。巻堀小学校の創立百周年を迎えるにあたって記念事業として、また、祖先の文化遺産を永く保存活用するため別棟に記念資料館の設計計画が企画されました。これを契機として次第に地区民のみならず村全体の郷土資料展示館としての計画に発展し、地元からの寄付や敷地提供、文化庁や県からの助成により、昭和52年3月31日玉山村歴史民俗資料館として竣工しました。平成18年8月16日より玉山歴史民俗資料館として運営しています。

また、渋民公民館では様々な催し物や企画展を行っております。ご利用の方は下記のお問い合わせ先にご連絡ください。

参考・引用：玉山歴史民俗資料館パンフレット

- ◆開館時間：9:00～16:00（見学時は事前に予約が必要）
- ◆休館日：毎週月曜（祝祭日の場合ときは翌日）年末年始
- ◆入館：無料
- ◆所在地：盛岡市玉山区巻堀字巻堀 33-2
- ◆お問い合わせ：渋民文化会館（019-683-3526）
- ◆展示内容：考古資料・歴史資料・民俗資料



☆市民参加展報告☆

平成23年4月19日から5月29日まで開催いたしました「中村秀雄コレクション にぎやか鶏グッズ展」には東北太平洋沖地震の影響もありましたが、148人の方にご来館いただきました。誠に有り難うございました。また、展示にご協力頂きました中村秀雄様にもあらためてお礼申し上げます。

資料は語る⑦



近世来以来、盛岡藩は百姓一揆の数が多し藩として知られています。ここで紹介する『仙台葉なし』は嘉永6年（1853）に三閉伊一揆の記録です。この一揆は、参勤交代費用や北方警備など疲弊した藩財政を立て直すために厳しい取立が行われたことを契機に全領一揆と発展したものです。『仙台葉なし』は、一揆の参加人数や盛岡藩および仙台藩の担当役人の名前・人数など克明に記録しています。

勿論、当館に所蔵されているものですから、旧都南村の肝入家（旧家）から寄贈を受けたものです。では、何故、沿岸部でおきた一揆の内容が克明に記録されているのでしょうか。『仙台葉なし』は、史料的にいわゆる風説書と見て良いでしょう。風説書とは、出来事や噂といった様々な情報を書留めたものです。肝入といった村の知識層は、隣村や藩内の肝入と姻戚関係を結んだり、知行主との関係の中で情報を得たりとあらゆるかたちで情報を交換しており、村の知識層はある種のネットワークを形成していました。おそらく、この『仙台葉なし』もそのようなネットワークのなかで仕入れた情報を事件の記録としてまとめたものでしょう。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介⑦



盛岡八幡宮例大祭は盛岡藩主が祭主となって行われる領内第一の祭礼です。山車行事について史料では、宝永6年(1709)ないし正徳3年(1713)頃から開始されたと記述されています。山車は松・桜・藤・牡丹・竹で天を、岩で地を、波・滝・しぶきで海を表現し、歌舞伎や歴史上の名場面を主題にして大八車の前後に人形を頂きます。山車前方に小太鼓、見返しに大太鼓の囃し方が乗り、楽を奏でながら進行します。

7月1日にオープンした「もりおか歴史文化館」には当時の丁印を復元したものがあります。是非一度、見学してみたいはいかがでしょうか。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

となんの昔ばなし二十七

『安珍清姫』

西見前柿木に感通庵という寺がありました。

宝永三年(一七〇六)開山、享保二十年(一七三五)廢庵です。御本尊は如意輪観音でありましたが今はどうなったかわかりません。月山の宮というものがありまして、村の人たちは八月八日を祭日として祀っており碑石も存在しているのとことです。

その庵には、安珍という修験僧がいました。ある時、雫石の安庭に行き、とある豪家に泊まりました。その家には清という田舎には珍しいほどの見目麗しい娘がおりました。安珍はひと目みてその美貌に心を奪われ、遂に相愛の仲となってしまいました。

しかし、安珍は僧の身、世間の噂をおそれ密かに庵を出てしまいました。清はやるせない思いで安珍の跡を追いかけて渡船場まで来ましたが、その姿を見ることができませんでした。清は安珍の薄情をいたく恨んで付近の沼に身を投じて、哀れ悲しく消えてしまいました。

そうとは知らない安珍は、旅を重ねて近江の三井寺から根来寺まで行こうとして、途中の道成寺に一泊しました。その夜、清の霊が安珍の枕元にあらわれ、安珍をさんざん悩ましめました。それがもとで安珍は遂に狂死してしまいました。

出典：『都南の民話』(都南歴史民俗資料館、一九八八)。